
超弩級超絶学園

郡司侑輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超弩級超絶学園

【Nコード】

N3966X

【作者名】

郡司侑輝

【あらすじ】

ある意味凄い学園がそこにあった。その名も超弩級超絶学園。暴れたり学んだりウェイウェイしたり……

設定（前書き）

設定らしきもんです

設定

舞台設定

とある世界。そこにはあらゆる世界から集められた生徒を一人前の人間に育てる学園があった。
その名も【超弩級超絶学園】。

教職員

校長・本郷 猛
教頭・一文字 隼
国語現代文・剣崎 一真
数学・五代 雄介
英語・門矢 士
地理世界史・火野 映司
保健体育・光 夏海（保健） 日高 仁志（体育）
科学生物学・乾 巧
家庭科・津上 翔一
道徳・左 翔太郎
情報・城戸 真司
日本史・天道 総司

古文・野上 良太郎
音楽・紅 渡

主な生徒

ユウト

本作の主人公。ツツコミ。茶髪でボサボサ。目は鋭い方。料理は覚えればレパートリーが増える程で応用が利きやすい。頭の出来は良い方である。イメージＣＶは保志総一朗さん。口が悪く、ツツコミが下手な人物には厳しい口で言い下す。けれども心は優しい男。

相棒は首から下げてるエンシェント。かのエンシェントドラゴンから取れた素材で出来た大剣。ペンダント状態のセーブモード、大剣状態のバトルモードに分けられる。

因みにプラネテューヌ出身。好きなゲームはパズルゲーム。

エンシェント

エンシェントドラゴンから取れた素材で出来た大剣。喋る事は出来、ユウトが触った物は彼も感じられる。所謂ひぐらしで言う羽入の様な感じ。

巨乳好きでユウトから飽きられたり軽い絶滅タイムが下される事もしばしば。イメージＣＶは石田彰さん。ユウトの相棒。

ランスロット

ルウィーで開発された魔法機人。女好き。イメージＣＶは置鮎龍太

郎さん。

好きな物は女（特にロリと貧乳。一番大好きなのはロムとラム）で嫌いな物は男（男の娘は別）である。

ロムとラムの良い教育係。だが下心丸出しでブランに半殺しにされる。

身長は2m程あり、ロムとラムの様々な要望に答えられるように開発されたため、モードチェンジが可能。ポニーモード、おえかきせんせーモード、ボードモード等にも変形出来るが、その際体積以下に変形する場合があるが、本人曰く「残りはロム様とラム様の心の中に」と言っている。

体によくロムとラムに落書きされるが、逆に本人は喜んでいるそう。だ。買い物は出来るが、幼女の為ならばとことん商品を値切りに値切る為、店は大赤字。

目は単眼でそれで見詰められると、妥協するしか無いという。

登場作品

【超次元ゲームネプテューヌmk2】【オールライダーシリーズ】
【スマブラX】【そらのおとしものf】【ガンダムシリーズ】その他

本編へ！

設定（後書き）

次回第一話

うえい
1

うえい1 「学園モノって言ったら、まずは出席じゃないのか?」bユユウト

第一話です

ランスロット「この世の総ての女の娘に感謝を込めて……………頂きます!」

毎回毎回前書きにて、登場キャラの声ネタ中の人ネタを行いますので

うえい1 「学園モノって言ったら、まずは出席じゃないのか？」bユウト

超弩級超絶学園。

その校舎に向かうべく、一人の男が走っていた。

ユウト「やっべ、急がねえと遅刻する!!」

エンシエントく全く。だからあれ程、寝る前に巨乳のお姉様方の写真集を読めと言ったろうに>

ユウト「ガチで棄てるぞこの野郎!!」

軽しくエンシエント・セーブモードを睨みつけ、超弩級超絶学園へと急いだ。

ユウト「間に合った……」

途中、殺人チヨップやセクハラや「狙い撃つぜ」やハロや「ねぶー」や「うえい」や色々な物へと突っ込みながら、ユウトはギリギリ到着。席に座ると同時にうなだれる。

エンシエントく全く。君も智樹の様にひたすら巨乳を、痛い痛い。痛いですユウトさん、ごめんなさい調子乗りましたからその握ってる手を離して下さい!!!!!!>

士「出席取るぞー、とつとと席に座れー！」

ユウトのクラスの担任である門矢^{かどや}士^{つかさ}は写真以外なら何でも出来る男で少しナルシスト。またの名を仮面ライダーディケイド。士が教室に入ると同時に、クラスの生徒は一斉に席に座る。

士「まずは、小野寺ユウスケ！」

ユウスケ「はい！」

リイマジクウガの小野寺ユウスケ。ユウトとはいいい仲でいい突っ込み仲間。

士「芦河ショウイチ、辰巳シンジ」

ショウイチ「おう」

芦河ショウイチはリイマジアギト。別名アギト一年生。

シンジ「はい」

辰巳シンジはリイマジ龍騎。ジャーナリスト。

士「尾上タクミ、友田由里、剣立カズマ」

タクミ「はい」

リイマジファイズの尾上タクミ。写真部に所属しており、副部長。

由里「はい」

写真部部长友田由里。タクミの彼女。オンナ

カズマ「はいはい！」

ブレイドのリイマジの剣立カズマ。料理部副部长。

士「アスム、ワタル」

アスム「はい」

響鬼のリイマジの日高アスム。ひだか

ワタル「はい」

リイマジキバの紅月ワタル。こうげつ

士「続いて、桜井智樹、見月そはら、守形英四郎、五月田根美香子」
さくらいともき みつき すがたえいしろう さつきたね みかこ

智樹「ほい」

桜井智樹はセクハラの魔王。そのかわり、痛い目に遇うが本人は懲りない御様子。勉強はダメダメな奴。ユウトと友達。

そはら「はい！」

見月そはらは智樹の幼なじみ。巨乳。得意技は殺人チョップだ。因みに金づち。

英四郎「はい」

守形英四郎はある意味変態。新大陸発見部部长。その中に智樹の他、そらは、ユウト、ユウスケ等がいる。

美香子「はあい」

五月田根美香子。実家は任侠道^{セレン}。銃刀の扱いは慣れている。自らを会長と呼び、この学園の生徒会長だ。

士「更に続けて、キラ・ヤマト、アスラン・ザラ」

キラ「はい！」

キラ・ヤマトはスーパーコーディネーター。努力家で学力は上位。アスランとは幼なじみでユウトの友達。同じく強制的に新大陸発見部に入部させられた。

アスラン「はい！」

コーディネーター。学力は常に上位。キラとは幼なじみ。

士「ラクス・クライン、カガリ・ユラ・アスハ」

ラクス「はい」

ラクス・クラインは学園一の美声を持ち合唱部。キラ・ヤマトの彼^オ女^メ。料理部部員。ネプテューヌの親友。

カガリ「ああ」

カガリ・ユラ・アスハ。キラの姉だか妹だか分らないが、本人は「あいつ（キラ）が弟だ！」と言い張るので無理矢理姉の立場にいる。

士「更に更に続けて、刹那・F・セイエイ、ニール・デイルンディ、ライル・デイルンディ、アレルヤ・ハプティズム、ティエリア・アーデ」

刹那「ああ」

刹那・F・セイエイ、極度のガンダム好き野郎。御歳21歳。

ニール「おう」

デイルンディ双子の兄貴。ユニの射撃の師匠。御歳29歳。

ライル「おう！」

デイルンディ双子の弟。御歳29歳。

アレルヤ「はい」

アレルヤ・ハプティズム、自分の中にもう一つの人格が存在するが、それはまた別の時に。御歳26歳。

ティエリア「はい」

ティエリア・アーデ、規律と校律に厳しい。年齢不詳。イノベイド。

士「フェルト・グレイス、アニユー・リターナー、マリー・パーフ

アシー」

フェルト「はい」

フェルト・グレイスは料理部部員。御歳19歳。刹那の彼女。オンナ

アニュー「はい」

アニュー・リターナーはティエリアと同じイノベイドであり、ライルの彼女。オンナ

マリー「はい！」

マリー・パーファシーはある意味アレルヤの幼なじみの人物。26歳でアレルヤの彼女。オンナ

士「そんでもって、ユウト、ランスロット」

ユウト「はい」

ランスロット「うむ」

士「ネプテューヌ、ブラン、ノワール、ベール」

ネプテューヌ「はいはい！」

ネプテューヌは一言で言えばおバカでちゃんぽらん。料理洗濯掃除がダメ。ラクスの親友。プラネテューヌの女神。料理洗濯掃

ブラン「……はい」

ブランは四女神の中で背もちっこい。胸も無い。が、キレると手が付けられない。本の虫。ルウィーの女神。

ノワール「いるわ」

ノワールは四女神の中で二番目に胸がでかいらしい。仕事と勉強は出来る方。ラステ이션の女神。

ベール「はい」

ベールは四女神の中で一番胸がでかい。ネトゲでは廃人の域にあり、一度に三つのパソコンを使用しネトゲをするほど。因みに腐女子。リンボックスの女神。

士「アイエフ、コンパ、日本一、がすと、5pb」

アイエフ「はい」

アイエフ、ネプテューヌのいい突っ込み役。プラネテューヌ出身。

コンパ「はいです」

コンパ、医者の見習い。誰に対しても敬語。プラネテューヌ出身。

日本一「はいはいはい！」

日本一、自称正義のヒーロー。ヒーローに憧れているのか、しょっちゅう本郷校長の変身ポーズを真似る。胸は無い。ラステ이션出身。

がすと「はいですの」

がすと、凄腕の錬金術師らしい。見た目とは裏腹に金にがめつく毒舌。幼女体型。ルウィー出身。

5pb「はい」

5pb、巷で有名なアイドル。リンボックス出身。一人称はボクな僕っ娘。何故か分からないが、仮面ライダー轟鬼^{とどろき}に変身できる音錠を左腕に巻いている。

士「次に、ネプギア、ユニ、ロムとラム」

ネプギア「はい！」

ネプギアはネプテューヌの妹。家事は姉より出来るが、女神化したときの姉の強さと通常時の殻を破る性格に憧れを抱く。刹那の妹分。プラネテューヌ出身なのは当たり前。女神候補生。

ユニ「いるわ！」

ユニはノワールの妹。いつも姉を目標として一日一日を一生懸命に過ごしている。ライルの弟子で、ニールとの違いが分かる。ラスティション出身の女神候補生。

ラム「いるよー！」

ロム「……いるよ」

ブランの妹のロムとラム。双子でロムが姉、ラムが妹なのだが、どっちが姉か分らない。物静かなロムと違い、ラムは活発。ブランに悪戯したりしている。ランスロット大好き。ルウイーの女神候補生。

士「そして、マリオ、リンク、ピカチュウ、カービィ」

マリオ「おう」

Mr. n i n t e n d o。赤い髭親父と言えば分かりやすい。キノコ大好き。キノコタウン出身。

リンク「はい」

ユウトの友達。緑系の服を好んで着る。勇気のトライフォースの継承者。ハイラル出身。

ピカチュウ「ピッカア！」

クラスのマスコットの存在のピカチュウはカントー地方出身。別名電気ネズミ。女神候補生の四人に結構人気。人懐っこくユウトにも懐く。

カービィ「ハアイ！」

別名悪魔の食欲を持つピンクボール。けれども女神四人には結構人気。理由はクッションにされやすいとか。ポップスターのププランド出身。

士「よし、全員揃っているな。それでは授業を開始するぞー！」

時は進み放課後。

部活動の時間となるのだが、ユウトの所属する新大陸発見部は狭い部室に、英四郎の他、ユウト、智樹、ユウスケ、キラ、そはらそして美香子が居た。

きついと言えはきついだが、それでも文句は言ってられない。

英四郎「よし、全員揃ったな」

ユウト「で、今日は何するんだ？」

エンシエントくその前にそはら、ユウトにお前の胸を揉ませてやれ！>

ユウト「はい、黙ってような。次言ったら棄てるぞガチで」

ユウスケ「何するんだ？」

英四郎「何、今日は少し趣向を変えてだな」

ユウト「それ以前にお前が趣向を変えたり凝らしたりするパターンが全然無い。いつものように俺か智樹が実験台になるほか無いだろ」

智樹「えええ！まじっすか先輩！！」

すると英四郎は眼鏡をクイツと直し、ユウスケに視線を向けた。

英四郎「今回の実験は……」

ユウト「やっぱり実験だったんだなこの野郎」

英四郎「強度を増し、更に軽量化に成功したハンググライダーにユウスケがテストフライを行う」

ユウスケ「ええっ、俺!？」

美香子「あらあゝ、あなたある意味不死身っていうじゃない?」

キラ「ユウト、もう英四郎君も会長もダメダメだね」

ユウト「言っなキラ。逆に悲しくなるわい」

そして場所は変わり、屋上。既に本郷校長の許可は下っており、校庭には見物客の他弁当売りのシンジとカズマが居た。
勿論この二人にはユウトがちゃんと突っ込み、退場させた。

ユウト「頑張れよ、ユウスケー!」

ワタル「ユウスケー!死なないでござーい!」

智樹「(何でだろう。トラブル臭がプンプンする)」

ユウトは応援し、ワタルは気をつけろとばかりに言い、智樹は既に嫌な予感がしていた。彼が言うに、デジャヴ感が多過ぎるとのこと。

観客以外にも、空を飛ぶことが可能なパープルハート、パープルシ

スター等の四女神に女神候補生が空中で待機している。これに関しては教頭命令。

パールハート「まったく……英四郎も馬鹿な事を毎回毎回。やってくれるわね」

パールシスター「直接本人に言わないとダメだね、お姉ちゃん」

屋上に戻すと、既にユウスケは腹を括っており、心なしか涙を流していた。当然だ、ハンググライダー等初めてでこれを飛ばすのは正気の沙汰ではない。

英四郎の合図でユウスケは滑空を開始した。

始めは順調に浮かんだが、一瞬空気が乾いた様な音が聞こえ、ハンググライダーの布地に穴が空いてしまい、バランスを崩して藻が浮かんでいる外プールに落ちてしまった。

ニール「ふう……弟子に苦勞かけた罰だ」

ユウト「お前かよ！？いい年こいて、恥ずかしく無いのか、アンタは！！」

ユウト「あー、疲れたあ」

ユウスケ落下事件（ネプテューヌ命名）によって新大陸発見部は暫く活動休止となった。理由は簡単。藻が浮かんでいる外プールにユウスケが落下し、そのプールの底にヒビが入ってしまい英四郎は修繕するしかなかった。

因みに、ニールの射撃はサイレンサーを使用していたためなのか、

不問となった。

暫く部活はやらないようだから、ユウトはまっすぐ帰宅していた。夕飯はミートソースパスタと鮭のムニエル。食べはじめる前に、ユウトはエンシエントを首から外し黙々とパスタを食べる。

エンシエント<前から思ったんだが……>

ユウト「セクハラ発言すんなら外に投げるぞ」

エンシエント<違うから！……私が言いたいののは、日本家屋でパスタを食うかって言うことだ>

ユウト「フランスの貴族の豪邸で焼き魚定食食うのと変わらない。っていう意味か？」

エンシエント<まあ、そうなんだがな……>

ユウト「別にいいだろ。一日の消費カロリーに応じてその日の夕食は決まるんだ。……親父からそう教わってる。死んだ親父からな……」

エンシエント<ユウト……お前本当は……>

ユウト「言っな。言ったら本気で……」

ピンポン！

シンミリとした空気の中、ユウトの家のインターホンが鳴った。今は午後7時位だろう、こんな時間に来客とは珍しい。誰だろうと思ったユウトは玄関まで行き、戸を開けた。

ユウト「どちらさん？」

ランスロット「ロム様とラム様を何処に連れ去ったああああ！！！！」

ユウト「知るかボケエエエエ！！！！！！」

魔法機人ランスロットという来客は開口一番ロムとラムをユウトが誘拐した様な喋り方で言った。

対するユウトは全力で突っ込み、セーブモードのエンシェントをバトルモードに切り替えた。

ランスロット「貴様ああ！可憐なロム様とラム様を何処にやったと聞いている！！」

ユウト「知らねえっての！！」

ランスロット「問答無用！必殺”真空突破”ああああ！！！！！！」

ユウト「最初から俺を犯人だと決め付けるな！！！！必殺”ドラゴンスラッシュ”！！！！」

ランスロットの理不尽を載せた技とユウトの突っ込みを込めた技がぶつかる。

因みに、今技をぶつけた場所はユウトの家の真ん前の道路であり、奇跡的に通行人はいなかった。

ユウト「もう止める、勝負は決まっている」

ランスロット「まだ私は、負けた訳では………ないっ！」

ユウト「無駄に……カッコつけるなあああ！！！！！！」

ランスロットのランスと俺のエンシェントの刃がぶつかる。その刹那――

ラム「ヤッホー、ランスロットおー！」

ロム「……お迎えに、来たよ」

――ロムとラムが現れ、ランスと刃はぶつからず、寸前で止まった。

ランスロットは直ぐさまロムとラムの下に行った。

ランスロット「ロム様ラム様、今まで何処に！」

ロム「……あのね、ネプギアちゃんの所に行ってきたの」

ラム「うんうん。ところで、ランスロットは何してたの？」

ユウト「あー、ちゃんばら……だよな、ランスロット」

ランスロット「う、……うむ。いい修行となりました。さ、ブラン様が心配しております帰りましょう」

ロム「……うん」

ラム「ばいばーい、ユウトー……」

ユウト「はい、ばいばい。………そういえば、飯途中だったな」

エンシェントをセーブモードにしたユウトは家に入り、飯を食うのだった。

続く

うえい1 「学園モノって言ったら、まずは出席じゃないのか？」byユウト

次回

ニユースキャスター<大シヨッカーが犯罪神四天王の復活に成功し、侵略を開始しました>

本郷「行くぞ、みんな！」

ユウト「第二話で、こんなにかよおおおおお！！！！！」

次回

うえい2 「俺の平和な日常を返せエエエエ！！！！」by智樹

うい2 「俺の平和な日常を返せエエエエ！……！」 b Y智樹（前書き）

第二話です

ユウト「^{ソウル}魂キヤノン！！」

今回、意外な展開がラストに

うい2 「俺の平和な日常を返せエエエエ！……！」 b y 智樹

きーんこーんかーんこーん！

仁志「よし、4時間目終了。次の体育は、剣道を行うぞー」

リンク「有り難うございましたー」

残り『有り難うございましたー』

4時間目の体育の授業が終り、更衣室で着替え食堂へ行く超弩級超絶学園の生徒たち。

その内、ネプテューヌは我先にと廊下を走りに走り、途中歩いていた野上良太郎をぶっ飛ばした。

良太郎「およろ……！！」

ネプテューヌにぶつかっただけに吹っ飛ばされ、遙か彼方に飛ばされる良太郎だった。

アイエフ「毎度ながら、野上先生不幸体質よね」

コンパ「それが野上先生です」

ユウト「っていうかその前にネプテューヌに突っ込めよ、おい！」

智樹は窓の外を見ながら、豚の生姜焼定食を今日も平和だと思いながら噛み締めていた。

智樹「いやあ、今日も平和ですなあ……」

そはら「トモちゃんの言う通りだね。ネプテューヌさん達女神様が居るから安泰かもね」

智樹「そーそー、これで平和をぶち壊す事件が起きなけりゃ、いいんだけどな」

ユウト「その前に、そろそろテストあるから覚悟したほうがいいぞ。あんたら二人コンパより低いからよ、点数」

智樹& amp・そはら「はい、すみません。頑張ります」

ユウトに言われた二人はうなだれ、言った。

言った本人のユウトはと言うと、テレビ画面に目を向けていた。バラエティー番組の様だが、突然緊急ニュース速報に変わった。

ニュースキャスター<緊急ニュースです！>

智樹「……」

テレビ画面のキャスターが言うと、智樹の背後にあった平和という文字がパズルのピースの様にバラバラに散った。

悪い予感が、でなくてもいい予感が、今起きたのだ。

ニュースキヤスター<大シヨツカーが犯罪神四天王の復活に成功し、侵略を開始しました>

ユニ「そんな……」

ラム「あー！またあの変態と戦わなきゃならないのー！？」

ロム「……怖い」（ブルブル）

ネプギア「復活って、……どうして」

女神候補生の四人を始め、四女神達にアイエフ達も苦虫をかみつぶした様な表情になった。

そこに「大体分かった」と言いながら、土はテレビを消しネプギア達に向かって言った。

土「大シヨツカー程の科学力は、馬鹿にならないからな。科学者である死神博士の手に掛ければ犯罪神マジエコノ又は無理でも、四天王なら造作も無い」

夏海「ですが土君！おじいちゃんはそのに居るじゃ無いですか！厨房に」

土の考えを否定するかのようにつた。

因みに夏海の祖父栄次郎はこの学園の厨房のオーナー兼シェフを本郷の推薦で任されている。

土「俺が言っているのは、爺さんじゃない方の死神博士だ。そうだと、本郷校長」

士が言っと、食堂のドアが開く。そこから現れたのは、木の枝が体中に付いている良太郎を背負った本郷校長が現れる。

本郷は良太郎（気絶中）を椅子に座らせ、生徒たちに指示を下す。

本郷「超弩級超絶学園の生徒全員よ、俺の話を聞け。今犯罪神四天王が復活してしまつては、犯罪神マジエコノ又の復活も起こつてしまう。そこでだ、君達には、四天王の討伐を頼みたい！」

仁志「いいか皆。これはテストだ！」

ユウト「……………へ？」

本郷校長の後に日高仁志はこれをテストだと証していた。
要するに筆記試験ではなく実技試験の様だ。

智樹「……………つまり、四天王を倒す。そのことがテストだと……………」

本郷「そうだが？何か不満か？」

それを聞いたネプテューヌを初めとした実技が出来ない連中は沸き上がり、歓喜し、急いで装備を整える。

ネプテューヌ「行くよーユウト、ネプギアー！！それとあいちゃん
こんぱー！！」

ユウト「おい、ちょっと待て、なんか違うくないか？っていうか、俺
今までテスト勉強したのに水の泡じゃねえか！！」

ネプギア「……………取り合えず、頑張りましょうユウトさん」

ユウト「……………ウン」

本郷「行くぞ、みんな！」

テスト苦手な連中「」「ハイ！」「」

トリック・ザ・ハードの進行方向の先には、ブランを筆頭にロムとラム、ランスロットにデバイスである攻撃自由を展開したキラと無限の正義を展開したアスランが居た。

後方支援には攻撃紅＋I・W・S・Pを展開したカガリとステージ上でマイクを手にしたラクスが歌っている。

ブラン「……………徹底的にぶつつぶす！」

ブランはプロセッサユニットを展開し、ホワイトハートに変身する。

ロム「……………ラムちゃん、いくよー？」

ラム「おっけー！」

ロムとラムもプロセッサユニットを展開し、ホワイトシスターに変身する。

ジャッジ・ザ・ハードの進軍をベール率いる部隊が待ち構えていた。メンバーはベールを中心に、アスム、ワタル、シンジとカズマ、5pb、そして新大陸発見部の主な四人である智樹、そはら、美香子そして英四郎だ。

グリーンハート「行きますわ、皆さん。アスム君とワタル君は私の援護を、残りの皆さんは好きに暴れ回っちゃって下さい」

シンジ「やったー！さーすがお姉様！編集長よりやさしー！！」

5pb「ボっ……ボクも、ベール様に着いていくよ」

カズマ「うえーいうえーい！」

リイマジキバット「キバって、行くぜ！がぶっ！」

ターンアップ

響鬼「行きますよ、ワタル」

キバ「分かりました、アスム」

智樹「出陣じゃあああ！！」

黒いブレイブ・ザ・ハード率いる大ショッカー部隊を任されたのは、

ノワールとユニを筆頭にシヨウイチ、ソウジ、タクミ、マリオ、日本一とがすくにデバイスデュナメスサーガを装着したニール、サバーニヤを装着したライル、ラファエルを装備したティエリア、そして青いファングと小太刀を装備したアニューがいた。

ブラックハート「みんな、黒いブレイブはユニが倒すわ。手を出さないで上げて」

ニール「そうだな。俺の弟子だ、なんとかなるだろ」

ブラックシスター「……ブレイブ、また力を貸して！」

ニール「おっしや、ニール・ディランディ、デュナメスサーガ！目標を狙い撃つ！」

ライル「ライル・ディランディ、サバーニヤ！乱れ撃つぜ！」

ティエリア「ティエリア・アーデ、ラファエル。行きます」

そして、マジック・ザ・ハードを迎え撃つ、ネプテューヌとネプギアはユウトに、ピカチュウとカービィとリンク、ユウスケ、デバイスのダブルオーライザーを展開した刹那と、ハルートを展開したハレルヤとマリー、そしてハ口型ロケットランチャーを装備したフェルト、そしてアイエフにコンパもいる。

ユウト「さてとねぶ子、俺達はどうでる？」

パープルハート「まずは、刹那とネプギアが先陣を切って。フェルトは二人の援護に回って」

ユウト「——となれば、俺とエンシェントの出番は？」

パープルハート「あいちゃんと私と一緒に、刹那とネプギアとは別にマジックを討つ！」

ユウト「なある。アイエフ、足引っ張んなよ？」

アイエフ「それはこっちの台詞よ。カービィとピカチュウは残りの皆と一緒にいてよ」

カービィ「ぽよ！」

ピカチュウ「ぴっかぁ！」

カービィとピカチュウは任せてくれと、言わんばかりに胸を張る。それを見たパープルハートは号令をかけた。

パープルハート「行くわよ、皆！」

パープルシスター「マルチプルビームランチャー、オーバードライブー！」

刹那「刹那・F・セイエイ、大ショッカーの世界侵略行為を紛争幫助と断定。ダブルオーライザー、目標を駆逐する。トランザムー！」

パープルハートの号令で、パープルシスターと刹那が切り込み隊長

の如く猛進。スライヌやシカベーターを叩き斬る。

刹那「トランザムっ、ライツザアアアア!!」

刹那がトランザムライザー状態で繰り出すライザーソードがシュジンコウキやコウケイキの大群を切り裂く。

その後、ファイナルカッター、ボルテッカー、スラッシュウェーブ等による衝撃が感じられる。

やがてユウト達三人は、パープルシスター達とは別の方向からマジックを狙う。ここでは流石のセクハラエンシエントも本気モードだ。

ユウト「行くぜ、エンシエント!」

エンシエントくうむ。We gods of fire, its power to give Pearl my ally! (炎の神々よ、私の盟友にその力を渡し賜え!)>

ユウト「必殺、"炎神轟斬刃"!!!」

エンシエント・バトルモードを勢いよく振り下ろし、龍の頭部を模した炎がマジックの背後を狙う。が、それをキラーマシンが盾になることで防がれた。

マジック・ザ・ハード「……不意打ちとは、汚い手を使うものだな」

ユウト「てか、なんでまた復活してんだよ」

アイエフ「あんた、大ショッカーに組するなんて、何処まで落ちぶれてんの?」

パープルハート「徹底的に貴女を倒すだけだけど」

マジック・ザ・ハード「……総ては犯罪神であるマジエコノ様のために」

ユウト「ちい……何を言っても、無駄みてーだな…俺はキラマシーンやる。いくら相手が敵でも犯罪神四天王でも、女を殺るなんて趣味じゃねえよ」

パープルハート「っ、あなた本気?!」

キラマシーンを一人で相手するというユウトの行いを、パープルハートは驚愕し問い質す。しかしユウトはエンシエント・バトルモードを構えたまま、キラマシーンだけを見てパープルハートに応えた。

ユウト「……俺だってな、ヒーローになりたい時だつてあるんだ。それに、親父の死の真相だつて知りたい。だから目の前の障害や壁はぶっ壊す!!」

エンシエント<では仕掛けるぞ! My name is Ancient Dragon, swear that the murder weapon to destroy the Killermachine or put its name! (我が名はエンシエントドラゴン、その名に置いてかの殺戮兵器・キラマシーンを破壊することを誓う!)>

ユウト「充填完了! いっくぜえ、”轟熱・龍斬刀”」

振り下ろしたエンシエント・バトルモードから炎の渦が現れ、それ

がキラーマシーンに巻き付く。そして身動きが取れなくなったキラ
ーマシーンを頭から切り下ろした。

結果、キラーマシーンは上下にズレ、爆発した。

歓喜するユウトだが、詰めが甘かった。キラーマシーンの残骸から
機械のコードの様な物が、ユウトとエンシエント・バトルモードを
拘束。電流を流す。

ユウト「あゝ ああああ！！！」

エンシエント<ユウト、しまっ——>

ダメージが蓄積されすぎたか、エンシエントはセーブモードに戻っ
てしまった。エンシエント・セーブモードはユウトの首から落ちて
しまい、ユウトは丸腰になってしまった。

ユウト「第二話で、こんなにかよおおおおお！！！！！」

苦痛の叫びを上げたユウト。だが、キラーマシーンの残骸から伸び
たコードをGN粒子を纏ったミサイルが当たり、ユウトの拘束を解
いた。アレルヤとマリーのおかげだ。

アレルヤ「ユウト！」

ユウト「ぐっ、……すまねえ、アレルヤ。助かったぜ」

パープルハート「ユウト……」

マジック・ザ・ハード「……よそ見をしている場合か？」

パープルハート「ぬうつ……！」

アレルヤとマリーに救われたユウトを見て、安堵するパープルハート。だが、マジックはその隙を狙う。辛うじてそれを防ぐが、若干押し負けていた。

以前より強くなっている。腕を交えて始めてマジックの力量が伺えた。下手すれば負けるどころじゃ済まされない。額の汗も気にせず、パープルハートは仕掛けた。自分の最高の一降りを。

パープルハート「はああああー!!」

マジック・ザ・ハード「効かぬ。既に貴様の動きは読んでいる」

パープルハート「そうね。でも、動きを読めるのは、私だけ見たいね……」

マジック・ザ・ハード「……何を言って……ぐっ!!」

ハレルヤ「ハッ!後ろがから空きだぜえええ!!」

ソーマ「油断大敵だ。犯罪神四天王よ」

もう一つの人格を呼び出すことで、超兵としての能力を一時的に上げたハレルヤとソーマ。アヒリテイー

加えて、彼の攻撃もたやすく受ける結果となった。

刹那「ここは俺の距離だ!」

パープルシスター「ここは私の距離です!」

刹那とパープルシスターの斬撃が、マジックの背後を捉え、ダメー

ジを与えた。

軽くだが呻くマジック。苦悶の表情をする。

刹那「犯罪神四天王でも万能では無いようだな」

ユウト「……の、ようだな。しかし、よくここまで来れたな」

刹那「雑魚はとくに片付けた。先程、ロックオン達から、トリックは蒸発。ジャッジとブラックブレイブは捕獲した」

ユウト「……だだよ。どうする？ 残念な美人さん」

詰め。それだけがマジックの脳裏にちらついた。甘かった、甘かった、詰めが甘かったのだ。

マジックの周囲を、ユウト達が囲む。

アイエフ「チェックメイトよ。降参したら？」

アイエフが降参を提案するも、マジックは黙秘し自分の意を表さなかった。

ユウト「ま、出来れば俺はアンタを殺したくない。カービィ」

カービィ「ぽよよ」

ユウトに呼ばれたカービィは差し出したユウトの腕にぶら下がり、大きく口を開けた。

ユウト「この桃色ブラックホールに吞まれたく無ければ、俺達について来い！」

ネプギア「えッ！？何言ってるんですか、ユウトさん！！」

ユウト「俺、思っただよな」

マジックを仲間に入れようとするユウトの行いをネプギアを始めとした少しまでもな者は驚愕し、代表してネプギアがユウトに反論するが、ユウトは物思いに、喋りだした。

ユウト「アンタは元々、破滅を望んでいたんだろ？終末も。そして自分自身破滅を望んだ。だがアンタは、現にこうして、俺達の目の前に存在している」

マジック・ザ・ハード「……その通りだ。だが、私達がいくら復活しようとも、犯罪神様は復活しない。怨念、嫉妬、歎き、哀しみ、怒り、様々な負の感情が貯まることで、犯罪神様は復活する」

ユウト「……そっか。じゃあ、アンタはどうしたい？」

マジック・ザ・ハード「……何？」

ユウト「アンタは自分がやりたいことがあるのか？今更だけど。犯罪神の復活は、多分無理かもしれないけど、それ以外で何か捜そうぜ。自分がやりたい何かを」

マジックに手を差し延べたユウトは、エンシエント・セーブモードを懐にしまう。

多少戸惑うマジックだが、その体に異変が起きていた。武装は砂になり、サラサラと消え去った。もう戦うことは出来ない。

ユウト「——で？」

士「新しい教師の紹介だ」

武零武「正義の心得を説こうでは無いか！！事務員の武零武！」
フレイブ

事務員の武零武の恰好はどこぞの恋次の様な黒装束。

制裁「ひゃーはははは！！全 足 前 進D A！事務員の制裁」
ジャッジ

同じく事務員の制裁の恰好はどこぞの海馬社長と同じ服。

摩十狗「事務員の摩十狗だ」
マジック

同じく事務員の摩十狗の恰好は元の体に黒いリクルートスーツを着こなしていた。

士「今日からこの三人は、内の学園の事務員となった。本郷校長の許可も得ている。それじゃ、授業開始するぞ」

ユウト「——何で超^{うち}弩級超絶学園の事務員になっちゃうかな？」

エンシエント「平和な事は、よき事かな」

最後にまともな事を言ったエンシエントだった。

続く

うえい2 「俺の平和な日常を返せEEEE!...!」 b y 智樹（後書き）

次回

ユウスケ「俺、こんな事は本当はしたくないんだ」

智樹「俺は——飛べる!」

シヨウイチ「俺を呼ぶなああああ!...!...!」

次回

うえい3 「実験には犠牲が付き物だ」 b y 英四郎

うえい3 「実験には犠牲が付き物だ」by英四郎（前書き）

第三話です

キラ「漢おとこの喧嘩は、命懸けえ！！」

今回英四郎の悪戯（実験）祭

うい3 「実験には犠牲が付き物だ」 by 英四郎

英四郎「おはよう、もしくはこんばんわ諸君。俺は守形英四郎。コロンブスが活躍した大航海時代、当時は胡椒等の香辛料は金銀と同じ価値があつたそうさ。そしてその当時は、天動説が唱えられていた……というが、智樹」

智樹「あ、はい」

英四郎「その天動説について、かい摘まんでも構わないから答えろ」

突然喋りだした英四郎は、たまたま近くに居た工口本を読んでいた智樹に答えを求めた。指名された智樹は微妙な頭脳を回転させ、答えを述べた。

智樹「確か……地球は平地で動いていない、動いているのは天体だけ、そして世界には果てがあつてそこには滝が流れている……でしたっけ？」

ユウスケ「すげえよ智樹！合ってる合ってる！」

英四郎「ユウスケの言う通り正解だ、智樹。当時の人間は天動説を信じていた。しかし、かの有名なガリレオ・ガリレイは地動説を唱え、天体は太陽を中心に回転していると発表したけど、当時の王政はこれを批判。ガリレオに火焙りの刑を言い渡す。が、ガリレオは澁々地動説を諦め、火焙りは免れた」

美香子「あら……残念ねえ、火焙り、出来なくて」

キラ「会長！あんな怖いですって！！」

リンク「……えげつない」

そはら「……………コペルニクスって人も地動説を考えてなかったつけ、トモちゃん知ってた？」

智樹「あ……………大体は」

どうやら智樹は知らないらしく、汗を垂らしていた。
しかし、その場にいたユウトだけはプルプルと振るえ、やがて爆発した。

ユウト「朝っぱらから人の家で新大陸発見部の活動するか普通！！
っていうか、くつろぎ過ぎだ！！！」

ユウトの実家の居間で、部活動する新大陸発見部。

彼等——主に英四郎と美香子だが——を追いつ、ユウトは神経を荒げ、二人に言った。

ユウト「大体、あんたがユウスケをハンググライダーで飛ばしたから活動停止になんたんだろ（うえい！参照）！だからって学校じゃ出来ねえからって、俺の家で活動すんじゃないよ！！あと智樹真昼間からエロ本読むな、特に女子の近くで！！」

ユウスケ「ユウト、どうどう」

リンク「っていうか、既に逃げてるよ、あの二人……………」

ユウスケがユウトを宥めている間に、既に英四郎と美香子に何故か

智樹とそはらも消えていた。恐らくは二人に連れ去られたのだろう。そこで、何故かユウトは一つ違和感を感じていた。それは、自分の首に下げていたはずのエンシェントがないことだ。するとユウスケがばつが悪い口調で言った。

ユウスケ「実を言うとき、俺がここに来た時から智樹の首に……」

ユウト「はあっ！？……なんてこった、変態同士手を組みやがった……」

リンク「……どんまい」

台風一過が過ぎた後の様な雰囲気醸し出すユウト家に、またも騒動の種が舞い込んできた。

どたばたと現れたのは紫髪と茶髪の少女二人だった。

ネプテューヌ「ユウトー！助けてー、死んじゃうー！！」

アイエフ「それは何度も聞いた！仕事サボる度にそう言っても無駄よ。イストワール様も困ってるんだから」

ネプテューヌ「ねー、ユウトー、あいちゃんがーじーめーるー！！」

ユウト「あー、……はいはい。昨日買ったケーキが冷蔵庫の中にあつたから、それ食え、そして仕事しろ」

ユウトに言われたネプテューヌはユウト家の冷蔵庫へ突っ走った。それを見たアイエフは、何を疑問に思ったのか、ユウトに問うた。

アイエフ「どうしたのユウト。やけに落ち着いているけど」

ユウト「いや、そのー……」

ユウスケ「実は、本人の許可無しにかくかくしかじか」

アイエフ「まるまるうまうま。あゝ、やっちゃったみたいね、あの二人」

ユウスケ「俺、あの二人を止めに行ってくるよ」

リンク「いつてらー」

がらりと引き戸を開けたユウスケは止めておいたトライチエイサー2000に跨がり、去って行った。

ユウスケ「俺、こんな事は本当はしたく無いんだ」

ユウスケの右腕には、若干引き攣った笑顔をしているユニが抱き着いていた。

何故ユウスケがこんな事をしているのか、原因は英四郎にあった。

英四郎「あの双子は一体何をしている？」

ユウスケとユニに目もくれず、目先のディランディ兄弟に視線を向けていた。

どうやらどっちがユニの師匠か決めている様子だ。デバイスを装着して。

ニール「……………今なんだった？」

ライル「だあーから、ユニは俺の弟子だ！ユウスケ落下事件の時にユウトから聞いた！一人の弟子に師匠は二人いらん！！」

それを見ていた英四郎は、影で待機していたユウスケと、合図を送った。

これはく実験1、ディランディ兄弟の前でユニがユウスケと並んで歩いた際の二人の対応>を実行するためだ。

ぎこちない足取りで二人の近くを通る。それだけだ。言葉はいらない。それだけで、ディランディ兄弟を気付けさせる事に成功。

後は、アニューが出るまで固まったディランディ兄弟だった。

ノワール「ちょっと！何このオチ無し！！誰得なのよ！」

虚しく響くノワールのツツコミは、今宵もキレがいいようだ。もつとも、ユウスケとユニはどうすればいいのか、分からない様だ。

智樹「次は俺か！俺なのか？！」

実験台という名の犠牲となった桜井智樹。彼は今、手作りの鳥の翼に派手な装飾を付けていた。

何故か合流したアスムとワタルに囃し立てられる智樹を美香子は力

モミールの紅茶を飲みながら觀賞していた。

英四郎「……………時間だ」

英四郎が言つと、とてつもない程の追い風が吹いた。そして、いつの間にか智樹は腹を括り、言つた。

智樹「俺は——飛べる！」

その後救急車のサイレンが鳴り響いたのも、言つまでもない。

英四郎が次のターゲットに選んだのは、天堂ソウジと将棋を対局している芦河ショウイチだ。

今の所お互い50勝50敗。現在101局目でソウジが一步リードしている。

ソウジ「待つたは無しだぞ、ショウイチ」

ショウイチ「うるさい！」

それを影で英四郎はネプギアに頼んで作つた変声メガホンを使用し、＜実験3、土が以前ショウイチに向けて言つた言葉をもう一度本人に言つとどうなるか＞を実行する。もはやここまで来れば悪戯になつてしまっているが……英四郎にとっては何か大切なデータの採取の為だろう。

早速実践する英四郎だった。

< 芦河さーん！ 芦河シヨウイチさーん！ 天堂ソウジさんにぼる負け
している芦河シヨウイチさーん！！>

シヨウイチ「俺を呼ぶなああああ！！！！！！」

その後、士は英四郎の濡れ衣によってシヨウイチから絶滅タイムを
受けたのだった。

ニンフ「あんたも暇ねえ。悪戯して何が楽しいの？」

呆れているニンフに言われた英四郎は、彼女に背中を向け、レポー
トを纏めていた。

英四郎「今の世の中笑いと笑顔という物が必要だ。以前マジエコン
が流通していた際、人々は本当の笑いを見失っていた」

ニンフ「ゴダイとオノデラの守りたい笑顔って奴とどう違うの？」

英四郎「さあな。あの二人が守る笑顔と言うのは、人を幸福しあわせにして
くれる。だが、マジエコンを入手した人々の笑いや笑顔は……………
尤も、笑わない俺では分からないがな」

ニンフ「強いて言えば、本当に幸福じゃないってこと？ マジエコン
使ってる人の笑顔って」

英四郎「……………さあな」

それだけ返した英四郎は一度もニンフに振り返らなかった。

智樹「くそ……………こんなことって……………こんなことって……………」

キラ「その前によく生きてたね、あの高さから落ちてても」

今智樹とキラはプラネテューヌにある智樹の住んでるアパートの部屋に居た。

因みに、隣の部屋がそはらだ。

智樹「にしても、守形先輩は一体何がしたかったんだ？あれからユウスケもユニもおかしくなったし」

キラ「それもそうだけど、エンシエントは？智樹が首に下げてたんじゃないの」

キラは智樹にエンシエントの所在について問い質す。しかし返ってきた答えは随分素っ気ないものだった。

智樹「？それならユウトの家のポストの中に……………いれた……………けど……………」

沈黙。しばしの沈黙。そして……………

キラ&mp・智樹」「ま、いいか」「

その頃、ユウト宅では帰り際アイエフがエンシェントを発見し、エンシェントは始終「置いてかれた……置いてかれた……」と呟いていたそうだ。

続く

うえい3 「実験には犠牲が付き物だ」by英四郎（後書き）

次回

ラム「ランスロットが女の子に?!」

「この姿はランスロット改め、藍だ」

日本一「ヒーロー見参!」

次回

うえい4 「ランスロットが女の子になった?!」byキラ

うえい4 「ランスロットが女の子になった!？」 b y キラ (前書き)

色んな意味でハチャメチャです

アスラン「ヅラではない。ザラだ」

今回ランスロットに異常が出てどん判出ます

うい4 「ランスロットが女の子になった!？」 byキラ

ランスロット「はあああああ!！」サザンクロス”!!”」

「きーかなーいねー」

ホワイトシスターROM「……どうして……」

ホワイトシスターRAM「んもー!どうしてあたんないのよー!！」

ランスロットとホワイトシスター達は、ギルドからの依頼で謎の魔導師の討伐の依頼を受け、山中に住むという情報を得て、遭遇。

攻撃を仕掛けるも、軽快な動きでランスロットの攻撃も、ホワイトシスターズの魔法攻撃も避けてしまう。

魔導師の身なりは、黒いローブに包まれており、肝心の顔は歪んでいる唇を除き影で隠れていた。声からすると、そはら程の少女の声だった。

ランスロット「良い腕だ。だが、私の前では無意味だ!」 霊槍ソーマリオ”!!”」

「だーからきーかなーいの」

ランスロットの必殺技もまた避けられてしまった。

もう戦闘に飽きたのか、その唇はへの字に曲げ、右手に闇色の光雷球を作り出した。目標は、ホワイトシスターズだ。

「もー飽きた。だから……死んじゃえ」

ドッジボールの要領で投げた闇色光雷球は真っ直ぐホワイトシスターズに向かっていく。

ただ向かって来る岳なら、女神候補生でも簡単に避けられるだろう。だが、まだ幼いホワイトシスターズは恐怖しているのか、逃げる事さえ叶わない。

ランスロット「ロム様、ラム様!」

ランスロットはその身を呈して二人の壁と化し、闇色の光雷球を受けた。

ランスロットは別名魔法機人とも呼ばれる種族の一人。魔法で起動しているので何の変哲も無い打撃攻撃ならびくともしない。だが、魔法攻撃を受けた際は何らかの異常がきたしてしまう。受けたランスロットはモノアイの輝きを失い、その活動を停止した。

「あーあ。やつちゃったね。でも、次は覚悟してよね?.....次は殺しちゃうよ」

謎の魔導師は口元をニヤリと曲げ、マントを翻すと同時にその姿を消した。

ホワイトシスターズは変身を解き、ロムとラムは動かぬランスロットへ駆け寄った。駆け寄ったロムとラムの流す涙が、ポタポタとランスロットに落ちていく。嗚咽を漏らす双子。

しかし、その瞬間有り得ない現実が、具現化されたのだ。

翌朝。校門の前でがっしりと腕を組み、登校する生徒を見回してい

た。

彼の名は、ひろし・サーシエス。赤く伸びた髪を後ろで束ね、赤いアゴ髭を立派に生やしたその男は、この超弩級超絶学園の生徒指導である。

ユウト「サーシエス先生、おはようございます」

サーシエス「おう」

ユウトを始めとする超弩級超絶学園の生徒達がサーシエスに挨拶していき、ロムとラムが彼の前を過ぎた。見たことも無い女の子を連れて。

サーシエス「おいちよつと待て双子。……誰だ、そいつ」

その後、サーシエスは頭痛に悩まされたらしい。

ロム「……それでね、ラムちゃんびっくりしちゃったんだよ。こんなふうに」

ラム「ランスロットが女の子に!？」

ブラン「…それで、こうなった」

ルウィー三姉妹は、クラスのメンバー達に自分達の目の前にいる少女に向けさせ、事の経緯^{いきわづ}を説明した。色々と問題が生じたのか、ブ

ランの目に隈がうつすらと出来ていた。どうやら徹夜明けらしい。その少女は、両手を腰に当て胸を張り、自分の正体を叫んだ。

「この姿はランスロット改め、藍だ」

自称ランスロットと名乗った少女…藍はそういった。

何処からどうみても普通の女の子だ。見た目ネプギアと大差ない体つきをしており、ショートボブの銀の髪に赤い瞳をしていた。

アスラン「つまりは、謎の魔導師の魔法攻撃を受けたランスロットが、魔法の暴発によって人間の姿になれるようになった……と……」

ユウト「おいおいおい……もう魔法って何なんだ、全く」

アスランが事実をまとめ口に出し、ユウトが頭を抱えボソリと呟くと担任の士が入室すると同時に、藍に告げた。ブランにもだ。

士「藍とブラン。生徒指導室でサーシエス先生と一文字教頭から呼出した。そして一時間目の英語は自習だ、剣崎先生が監督する」

一時間目の授業連絡を告げた士は教室を出た後、ブランは溜め息をつきながら藍を連れ生徒指導室へと向かったのだった。

ブランと藍が出たのを確認したのか、エンシエントはポツリと呟いた。

エンシエント<……主人のブランより発育が良い体型だな。よし、ユウト後で揉め！>

ユウト「絶滅たーいむ」

その後エンシェントの悲鳴が聞こえたのは、言うまでもない。

一文字「これはまた面倒臭い事態になってしまったな……」

サーシエス「本郷校長が不在の時に……」

ブラン「それに、その魔導師の行方も知らない……」

藍「私は別にロム様とラム様のお世話が出来れば構わないのだが……」

……」

生徒指導室では、一文字教頭が頭を抱え、サーシエスが溜め息をつき、ブランは魔導師の状況を説明し、藍は特に同じず茶を啜る。

サーシエスはそんな藍に指差し、言った。

サーシエス「お前今の体考えて言っているのか？よく考えろ、今まで通り双子の相手出来んのか？」

藍「ロム様とラム様を双子とあだ名すな！」

ブラン「いいから落ち着いて藍。その体で、ロムとラムにこれまで通り、世話出来る？」

ブランに言われ、暫く考える。

ポニーモード、おえかきせんせーモード、カートモード、今までロ

ムとラムを世話してきた魔法機人ランスロットだからこそ出来た。
だが、人間体の藍ではそれが出来ない。そう考えた藍の顔は次第に
暗くなり、冷や汗も大分目立ち、ついには発狂した。

藍「あああ！これではロム様とラム様のお世話があああああ！！
今まで通りする事が出来ない！！おのれ、愚劣なる魔導師めが！！
！」

うがああ！という様な叫びが似合う様にのたうちまわる藍。それを
見ていたサーシエスは呆れ返りながらも、茶を啜りながら言った。
サーシエス「だけでも、風呂は一緒に入れるだろう？その体、どっ
からどうみても普通の女の子だ」

それを聞いた藍は一旦大人しくなり、暫く間を置いてようやく喋っ
た。

藍「……これからは…毎日ロム様とラム様と御入浴出来るう！！」

一文字「ブランもう教室戻ってて良いぞ。この変態連れてな」

ブラン「言われなくても、連れてくつもり。失礼するわ。……とっ
とと来いってんだよ、変態野郎！！」

藍「ブラン様、お許しを！！」

その後、廊下で藍の断末魔が響き渡り、それを一文字教頭とサーシ
エスは聞き流した。頭痛薬と胃痛薬を探しながら。

場所は変わってユウト宅。放課後各女神達と女神候補生とチームソレスタル・ビーイングとチームエンジェルの姿があった。

ユウト「……で、どーすんだ？イストワール様から何か聞いてないのかねぷ子」

集まって直ぐに、開口一番ユウトがネプテューヌに謎の魔導師についてのを聞いた。だがネプテューヌは何も無いと言っふうに首を横に振りながら言った。

ネプテューヌ「それがいいすんでも解らないってさ」

ネプギア「謎の魔導師の行方はルウィーはもとより、ラストイションやリーンボックス。そしてプラネテューヌが総力を上げて搜索しているんですが、未だ何も…」

ネプギアも補足し謎の魔導師についての搜索状況を話した。だが、これも何も無いという。

まるで雲を掴むような存在の謎の魔導師。その活動目的が今の所定かにしていない。

ユウト「ノワール、そっちは？」

ノワール「ケイも同じ事言ってるわ」

ベール「チカも同じ事を。しかし、何故この時に本郷校長が不在なのかしら」

ラクス「何にせよ、どなたも用心しなければいけません」

カガリ「だが、次に奴は何を仕出かすか解らない。ソレスタル・ビーイング。そちらは？」

ティエリア「ヴェーダからは何も来ていない。恐らく奴は、その存在を自由に認識出来なくする力があるか、もしくは別次元で大人しくしているだろう」

刹那「一般市民には情報規制をしているのか？」

ユニ「既に敷いているわ。これでシェアが減ったら元も子も無いし」

全く結論が出ない。次第にキラは珍しく苛立ち、奥歯を噛み締めた。そんな彼が珍しいのか、ラクスが心配そうな顔をし不安な表情に変わる。

そこへ、引き戸が勢いよく空けられる音と二つの走って来る足音がドタバタと聞こえてきた。今ユウト達がいる襖が勢いよく開かれ、アイエフとコンパが現れた。

ユウト「床が擦れる。あんまり走んな」

アイエフ「それより、居場所がわかったのよ！」

コンパ「謎の魔導師さんのです！」

アイエフとコンパの報告に、その場にいたユウト達に一瞬緊張が走った。その中でユウトはあることに気付き、アイエフとコンパに向かって、言った。

ユウト「本題に入ろうとするとところ済まないが、靴を脱げ」

アイエフ& amp ;コンパ「あ!？」です」

慌て過ぎたのか、靴を脱ぐのを忘れた二人は玄関まで戻り、靴を脱いだ。その間ユウトは廊下に付いていた足跡を雑巾で拭いていた。そしてちゃんと靴を脱いだ二人は、ユウト達が集まっている部屋に來ると、下げていたバッグから人数分の指名手配写真が配られた。写っていたのはユウトが知らない少女。しかしネプテューヌ達女神とネプギア達女神候補生は目を見開いていた。どうやら知っている人物らしい。

名前の部分をユウトは声に出して読んだ。

ユウト「犯罪組織マジエコンヌが誇る元構成員リンダ……誰だこいつ」

ネプテューヌ「あー！これ下っ端だよね!？」

ユウト「構成員だから下っ端って名前は無いだろ。しかし、こいつ魔法使えるのか？」

ユニ「どっちかって言うツルハシで戦ってる様なものね。弱っただけ」

どうやらそこまで実力は無かったらしいとユウトは推測。キラはアイエフとコンパにリンダの行方を問う。

キラ「アイエフ、コンパ。彼女は一体何処にいるんだ？」

アイエフ「それが何処にも反応が無いのよ。恐らくもう何処か別の世界にいるしか考えられないわね。今頃諜報部もてんでこ舞いよ」

コンパ「もうお手上げですう……」

アイエフとコンパは参ったと言わんばかりに頭を垂れた。

そもそも、何故四ヶ国が揃って一人の魔導師の行方を探しているのか。それは超弩級超絶学園教頭の一文字がそれぞれの教祖に協力を仰いだからだ。ランスロットが被害を受けてルウィーは二つ返事で同意。他三ヶ国は主に女神候補生が掛け合いこれも同意。

よって謎の魔導師を討つためプラネテューヌ…ラスティション…ルウィー…リンボックスのそれぞれ諜報部員が現在総力をあげている。

突然。ティエリアの目に異変が起きた。イノベイドである彼がヴェーダから通達を受けている証拠だ。同時にアイエフのケータイにも連絡が入った。そして暫くすると、二人は同時に今自分が知った情報を述べた。

ティエリア「今ヴェーダから通達があった」

アイエフ「諜報部の子から連絡があったわ」

ティエリア& a m p ;アイエフ「謎の魔導師は、すぐに近くにいる……」

戦う術を持たぬ藍は、無謀にも謎の魔導師……もといリンダと邂逅

した。

リンダのその顔は以前犯罪組織に属していた時よりも狂気に満ち満ちていた。

リンダ？「あんただあれ？あたし知らないんだけど」

恐怖を与えかねんリンダのその言葉は藍に向けられていた。対する藍は不敵に笑い、空に拳をあげて言った。

藍「……そうだな。今の私は人間体での戦闘を知らない。返して貰うぞ！魔法機人ランスロットという体を！」

リンダ？「ああ、あの時の。よわつちい女神候補生の盾となった愚かな魔法機人さん」

藍「ロム様とラム様を愚弄するな！……私は……私は、魔法機人……ランスロットだ！それ以上でもそれ以下でも無い！！」

そう叫んだ藍。それを見てリンダは狂気の笑みを浮かべた。いつの間にか空は曇り、雷雲が立ち込めた。轟く雷鳴、強く吹き付ける雨風。藍はずぶ濡れになりながらも、リンダだけを見ていた。すると、何処からかヒーローが現れる時に流れる音楽が響き、崖の上から人影が現れた。

日本一「ヒーロー見参！」

ヒーロー道を突き進み、ヒーローに憧れるゲームギョウ界に現れる一陣の風。それこそが彼女、日本一なのである。その彼女の後ろに、四人ほど人影があった。

智樹「思春期の塊見参！」

泣く泣く渋々やらされた智樹、

アストレア「ご飯大好き見参！」

食事券と引き換えにやらされたアストレア、

マリオ「髭親父見参！」

面白そうだからという理由で来たマリオ、

リンク「緑の勇者見参！」

そしてスカイウォードを会得した瞬間に拉致られたリンク。

以上五人が名乗ると、その背後が爆発した。

藍は期待半分呆れ半分の表情をしていた。

リンダはと言うと、ローブに隠していた銃火器を取り出し、上空で滞空し周囲に乱射する。

リンダ？「アハハハハハハハハハ！」

銃弾は留まる所を知らず、雨の様に降り注ぐ銃弾。生身の藍はアストレアのイージスで藍の盾となった。日本一はリンダの死角からサウザントナイフを繰り出し、智樹はカードの力を解放し羽根飾りのバズーカ砲を繰り出す。さらにリンダの側方からマリオファイナルとライフオー斯拉ッシュも繰り出された。しかし、肝心のリンダは無傷のままだった。

リンダ？「あーあ。傷一つ付けられなくて、そこまで大威張り？全

く、君達は今ここで殺す。今決めたそう決めた」

無茶苦茶な言い訳を言ったリンダは頭上で右手で巨大な黒い火の玉を、左手で同じく巨大で白の火の玉を生成した。それを振り下ろすその瞬間。数条のビームによって阻止された。

キラ「やめろおおおおおお！！！」

攻撃自由を展開し、さらにミーティアをも展開装備したキラがリンダに攻撃を阻止した。

避けるリンダだが、キラはそれを逃さず巨大なビームサーベルを振り下ろす。

避けては攻撃、避けては攻撃のたちごっこを繰り返している両者は、次第に肩で息をするようになった。

リンダ？「……はぁ……はぁ……やるねえ、君」

キラ「もうやめるんだ！こんな事！」

リンダ？「やめる？どうして？こんなに楽しい事を？アー……ッハッハッハッハッハッハッハッハ！！！」

言って高らかに笑うリンダ。しかし、キラは静かに激昂。ミーティアの全砲門を解放する。リンダは奇跡的に避けるがリンクの鞭が直撃、続けてアストレアがクリュサオルを構え突進。

超振動光子剣は、目に見えない程振動し目標を切り裂く程度の能力を持つ。その最強の矛にイーグリスという最強の盾を持つアストレアは、まさに戦天使。
ヴァルキュリア

アストレア「はぁぁぁぁ！！！」

リンダ？「しつこいなあ。もう手加減なんかしないもんねー」

アストレアの攻撃を悠々と避けたリンダはケタケタと笑いながら言った。

しかし、その彼女の上空で暗雲が割れ、中から男の顔が現れる。目が光ったと思えば、「どん判」と文字が浮かびその口から極太のビームが吐き出された。リンダはそれを避ける事が出来ず、魔導師としての魔力が浄化してしまった。

リンダ「あててて……ん？アタシ何やってんだ？」

ユウト「御目覚めの様だな」

目を覚ましたリンダの周囲には、先程ユウトの部屋に集まっていた人員と藍達がいた。藍自体はまだ人間体の様だ。

ロムとラムがリンダに抗議を立てるが、立てられた本人は全否定どころか、黙秘を貫いていた。このままでは埒が開かない事を思ったユウトはエンシエント・バトルモードの刃をリンダに見せ付けた。丁度いい脅しとなったのか、リンダはようやく喋りだした。

リンダ「……犯罪組織が崩壊して、大ショッカーなんてのが出たお陰で、アタシは更に影が薄くなった。何処へ行っても小悪党まがいの悪行しか出来なかった……」

ユウト「……それで？」

リンダ「……つい数ヶ月前だ。アタシの体に何かが入ってアタシをアタシじゃない何かにした。後はお前達の見たものがそっだよ」

つまりは、今回の騒動はリンダの意志ではなく、何者かの手によって行われた騒動だという事だ。

アスラン「それでどうするんだ、この下っ端」

キラ「下っ端だし……どうするラクス」

ラクス「下っ端さんの処遇は決めかねます。カガリさんはどう考えますか？」

カガリ「ええ……ユウナの様には殴れない下っ端は……ベールパスお前知り合いだろ？」

ベール「下っ端の処遇は本郷校長に任せた方がいいですね」

ブラン「……その前に、ランスロットを治して貰わないと。この下っ端に」

ノワール「私はどうだっていいわ。下っ端だし」

ネプテューヌ「下っ端だし……学園の清掃員に雇おうよ」

ネプギア「下っ端さん、良かったですね」

ユニ「下っ端なんだから、文句は言わせないわよ」

ラム「下っ端のクセに生意気なのよ!!」

ロム「……」(こくこく)

刹那「構成員が前に出過ぎるのは、良くないと思うがな」

ニール「下っ端は下っ端らしく……」

ライル「…大人しく縁の下の力持ちになるんだよ」

ハレルヤ「下っ端に生きる価値なんざ何処にもねえんだよ」

ティエリア「絶望した！万年下っ端の貴様に、絶望した!!」

マリオ「いい再就職先、奨めるぞ下っ端」

リンク「下っ端なんだからさ、あんまし目立つの良くないと思うぞ」

アストレア「はいはいはい！下っ端って何ですか!？」

智樹「下っ端は下っ端だ」

日本一「いくら下っ端でも、悪は悪！だから私は、それを砕く!!」

リンダ「どいつもこいつも下っ端下っ端ウゼエんだよ!!!!アタシはな、犯罪組織マジエコノヌが誇るマジパネエ構成員のリンダ様
たあ、アタシの事だ!!」

ユウト「もう良いからリンダ黙れ」

結果、あのあとユウトから言葉のダメージを受けすぎたリンダは超弩級超絶学園の清掃員として就職。そこで摩十狗ことマジック・ザ・ハードと再会し何故だか分からないが違う意味でやる気を出したらしい。

ユウトは今、プラネテューヌにあるネプテューヌとネプギアの家キッチンにいた。理由は至極簡単。

ネプテューヌ「ユウトー、クリスマスケーキまだあー？」

ネプテューヌが時期が時期なのでクリスマスパーティーをやりたいと言い出し、今に至る。

ユウト「まだクリームのデコレーション出来てねーよ。それよりもいきなりクリスマスパーティーなんて、どういう風の吹き回しだ？」

ネプギア「シンジさんとカズマさんが強引にお姉ちゃんに同意してやるうって事になったんです。……あの、料理作るのお手伝いしますか？」

ユウト「じゃあ、カップマフィン出来るか？それ頼む」

ネプギア「あ、はい！」

それから数時間が経過。超弩級超絶学園の生徒達と教師達が集合し、プレゼント交換を開始。軽快な音楽に合わせ、手渡していく。適度なタイミングでイストワールが音楽を止めた。

各人渡されたプレゼントを開けると…

夏海「ちよつと誰ですか！？蜜柑に八朔ほんかんつて！」

士「誰だ！執事ゲーム入れたのは！！」

ベール「上手いツツコミの入れ方……！？」

ユウト「エロ本……おい、智樹い！」

エンシエント<早速読め！って、痛い痛い痛い痛い痛い！！絞めるな握るな！！>

智樹「……誰だ、こんなもん参考書入れたの」

アスラン「あ、それ俺だ」

結果、散々な人もいれば、

雄介「お、クウガのマーク！」

ユウスケ「何これ？……包丁！？」

翔一「湯呑み？」

シヨウイチ「カメラ？」

真司「あ、それ俺のカメラ。っていうか、俺のもカメラ？！」

シンジ「ってこれ菊地西洋クリーニング店の割引券！？誰だか予想付くんだけど」

巧「誰だインスタント味噌汁をプレゼント入れたの。俺は猫舌なんだよ！」

微妙な物が来たりしていた。
中には嬉しく踊る者もいた。

続く

うえい4 「ランスロットが女の子になった!？」 b y キラ（後書き）

次回

フェルト「よーよー……って知ってる？」

ユウト「小物だね」

キラ「知っているかい。主を」

次回

うえい5 「よーよー釣りたいかあい」 b y 美香子

つえい5 「よーよー釣りたいかあい」 by美香子(前書き)

今回はそらのおとしもののよーよー釣り大会から

ランスロット「戦うしかなかるう。互いに敵で有る限り、どちらが
萌え死ぬまでな」

多分イロイロと無茶な設定とかが出ますが、出来れば、スルーお願いします

うい5 「よーよー釣りたいかい」 by美香子

あれから、ランスロットは自由に機人体と人間体を自由に変える事が出来た。

それとはまた別に、リーンボックスにて冬祭を決行していた。売上の収益の一部は孤児院に送るらしいが、女神が女神なので、色々心配である。

ユウトは厚着して冬祭の会場に向かった。ドームでは5pbのコンサートがやっているようだ。

ユウト「リーンボックスでも、雪は降るもんなんだな」

初めて訪れるリーンボックスに関心を得たのか、若干イメージが違うのに戸惑っていた。ユウトのイメージでは春のイメージが強かったのだが、こうして雪が降るのも良い風景である。

ユウトは人を待っていた。ユウト初めてのリーンボックスという事で、案内人というか同行者を彼は待っていた。しばらくすると、その同行者が二人並んでやって来た。ネプテューヌとネプギアだった。

彼女達は先日、リーンボックスの冬祭に初めて行くというユウトに同行しようと言ってきた。リーンボックスはユウトには初めてなので、同行者がいることが何よりも安全だと考え同意し、今に至るのだった。

ユウト「悪いな、そっちも仕事があるつてのに」

ネプギア「いえ、実を言うとさっき全部終えたところだったんです」

ネプテューヌ「おかげで徹夜だよー……」

ユウト「珍しく逃げなかったんだな。あ、あれか？アイエフとイス
トワール様の二人に監視されたとか？」

ネプテューヌ「……………」

ユウト「…ねぷ子？」

ネプテューヌ「さあ行くよ！ユウト初めてだからね、リーンボックス」

ユウト「図星かよ！！そしてさっきの間は何だったんだ？！」

さすが祭なだけに出店はあった。射的、輪投げ、タコ焼き、ヤキソバ、ジャガバタ、型抜き等様々あったが、季節的にひよこや金魚は無かった。

所持金が月平均8500クレジットのユウトにとって、4000クレジット均一の出店の食べ物是有り難い物だ。ただし、ネプテューヌは財布を持って来なかった事を知ると、ユウトは落胆する。

ユウト「おいおい…。これはあれか？俺に奢れって事か？」

ネプテューヌ「その手があった！」

ネプギア「その手は考えて無かった……………」

ユウト「——だが断る」

ネプテューヌ「そんなぁ！ケチ、甲斐性無し！」

ユウト「何だそんな事を言うのか？さっきのは冗談で本当は奢ろう
と思ったんだが……ケチとか甲斐性無しって言うんじゃない、ホントに
奢らねえぞ」

ネプテューヌ「ねぷう！？」

ネプギア「お姉ちゃん……見事にからかわれてるよ？」

ユウト「あれ、ばれた？」

ネプテューヌ「じゃあタコ焼き！」

ユウト「復活はえよ！？」

タコ焼きの屋台に到着すると、何故か行列が出来ていた。誰が作っ
ているのだろうと、好奇心をくすぐられ覗いて見ると、擦り鉢巻き
をした智樹とエプロン姿のイカロスがそこにいた。

手元のタコ焼きの調理工程を見ると、タコの大きさは普通の大きさに
比べてやや大きめ、回すタイミングも絶妙で適度な焦げ目が出来
ていた。

タコ焼き自体の大きさも一口サイズで六つ。代金は450クレジッ
ト。

ユウト「良い出来だ。それに値段も丁度良さそうだ」

ポツリと呟くユウトだが、首下のエンシエントは何か気付いたの
か、ユウトとネプ姉妹に言った。

エンシエントくむ？……ユウト、あれはフェルトではないのか？>

ユウト「ん、フェルト？何処に」

エンシエントくあそこだ。テントの側で看板を持ち上げている>

エンシエントに指摘された場所を見ると、確かにフェルトが看板を持ち上げ突っ立っていた。しかもその看板には、『よーよー釣り大会参加受付中』と書かれてあった。

気になった三人はフェルトに近付き、声をかけた。

ユウト「フェルト……何してんだ？」

ユウトの声に気付いたフェルトはこちらに向かって、疑問を含んだ様に言った。

フェルト「よーよー……って知ってる？」

フェルトの指差した先には、ネプテューヌの指からぶら下がっている水風船のよーよーだった。

三人は「知っている」と言い、フェルトはユウトに参加用紙を渡し、ネプテューヌとネプギアをテント裏の通路に連れていった。

何が何だか解らなくなったユウトは申し込み用紙に必要事項を記入し、戻ってきたフェルトの指示に従っていつの間にかあった巨大な建物に入ってしまった。

待合室というべきか、控室というべきか、そんな場所にはユウトを除いて超弩級超絶学園の生徒達が居た。そのうちの数人は居ないみ

たいだが、改めて見ると男ばかりだった。

先程タコ焼き屋をやっていた智樹もそこにいた。

代表的な人数を上げるなら、リイマジ、キラとアスラン、刹那とアレルヤ、リンクにピカチュウ等。魔法機人のランスロットさえもいた。

ランスロット「……むっ、おい貴様^{ユウト}」

ユウト「貴様と書いて俺と読むなあほ。どうしたんだ？」

ランスロット「先程フェルト殿によりよーの事を聞かれてな。答えたらロム様とラム様が連れていかれた」

ユウト「こつちはねぷ子達と。後はあんたと同じだ」

ランスロット「……何やら不穏な気がする」

ユウト「奇遇だな。俺も思っていたところだ。どうだ、お互い探し人があるんだ。ここは手を組もう」

ランスロット「…ふうむ。………良かろう」

会話する二人。その控室の巨大モニターから聞き覚えのある声が聞こえ、その姿を見せた。

美香子くみなさぁん。今日はお越しいただいて、ありがとう。会長、嬉しいわぁ>

その時、智樹とユウトは直感した。
これからとてつもなく嫌な気がして堪らない。下手をすれば明日の

お天道様さえも拝めない位。

その美香子の後ろには、しゃぶしゃぶの鍋のような温水プールが映っており、所々黒い点が見えた。

美香子<それでは男の人達は、支給された水着を着用して、モニターの下の通路を通って来てちょうだい>

ショウイチ「おいおい、三十路越えた男だぞ俺は」

ソウジ「全くだ。といたい所だが、マユがグレイスちゃんに連れていかれたし……しょうがない。行くか、ショウイチ」

ショウイチ「まあ…八代も連れていかれたしな」

ユウト「ソウジさんとショウイチさんですか？実は俺もねぶ子とギア子も連れてかれて…」

ランスロット「私もだ。ロム様とラム様が…」

智樹「俺もイカロスとそはらが」

キラ「僕はラクスが」

アスラン「俺もカガリが」

ライル「ユニもアニューもノワールもだ」

ニール「そういえば、ブランもいねえな」

アレルヤ「ぐすつ……………マリイイイイイイイイイイイ！！

「!!」

タクミ「えぐっ……………由里ちゃああああああん!!!」
「」

士「こっちは小夜と夏みかんだ」

他にも自分の親しい女性がフェルトに連れていかれたと言われている。そしてユウトは深く考えるのを一時止め、支給された水着を着る。ただし、その中で一番異様に目立っていた水着があつた。それは古来より伝わりし、日本男児特有の象徴とも言える褌だ。^{フンドシ}それが今、ショウイチとソウジに着用されていた。

ショウイチ「何じゃこりゃあ!!」

ソウジ「フンドシだ」

ショウイチ「いや、わかるだろ!俺はトランクス派だよ!」

ソウジ「俺もだ」

ショウイチ「そこじゃない!何故冬に水着に着替えなければならない!」

ソウジ「誰得何だろうなあ?」

ショウイチ「おまつ、そこじゃないって言ってるだろ!」

ソウジ「何をそんなにカリカリしているんだ?シワが増える」

シヨウイチ「だぁーかぁーらぁー！！お前、今の状況わかってるのか！？」

これ以上三十路の漫才を見たくないユウトとランスロットは指定された通路を歩んだ。薄暗い通路を水着一丁は寒く厳しいところだ。先程漫才を終えたのか、シヨウイチとソウジが合流してきた。もう全員ユウトの近くを歩いていた。

シヨウイチ「……まったく、八代はどうか連れていかれるし、ソウジのボケには喉が枯れそうだし……」

ユウト「シヨウイチさん、今度胃薬買いに行きませんか？」

シヨウイチ「……助かる」

どれ程歩いただろうか。やがて出口へと出ると、モニターに映ったしゃぶしゃぶプールへと到着。拍手する美香子と何処から沸いて出たのか、観客が多かった。

美香子「皆ようこそ、ようー釣り大会へ」

男共『ようー釣り大会？』

美香子「ルールは簡単。その前に、桜井君。ようーってなあに？」

智樹「へっ？そりゃあ、水風船に輪ゴム付けて、バインバインって手の平で叩く奴ですけど……」

智樹が言い終わると、美香子は徐おもむきに着ている服を脱ぎはじめ、下に着ていた水着があらわになった。

他者多様のリアクションの中で、ユウトは悟った。やはり嫌な予感
は当たる。

ユウト「今度城戸先生の知り合いの占い師に相談しよう」

ポツリとユウトが呟き終わると、水着姿の美香子は自慢（なのだろ
うか）の胸を揺らし、

美香子「そうよねえ。バインバインよねえ」

と言って、腰にロープを結び付かせ、湯気の浮かぶしゃぶしゃぶプ
ール（以降シャプール）に思いつ切りダイビング。そのロープの端
には、体育教師の日高仁志が釣りの要領で釣り上げる。

連れたのは、リーンボックスの女神であるベールを抱いた（という
か捕まえた）…美香子だった。

そのベールのバストはバインバインという効果音が似合うかの様に
撓たわわに揺れた。

美香子「このように、女の子を釣り上げて胸の大きい子ほど点数が
高いから…制限時間内にいっぱい女の子を釣り上げてちょうだいね
それでははあじめえ！」

ユウト「うおわっ！おい皆見ろ！」

美香子が開会宣言を言い終わると同時に、ユウトはシャプールの黒
い点の正体を見付けた。

それは髪の違いはあれど、殆どフェルトに連れていかれた女性陣だ
った。先程釣れたベールと同じ様に、ロープで手足を縛られ、二の
腕の位置に浮き具があった。

これにやる気を出したであろう智樹はカードの力でトモ子に変身。

誰よりも先に胸の大きい女性達を釣り上げていった。釣り上げ約のキラが心なしか、全て諦めた様な顔をしていた。

ユウトとランスロット以外にも全員投げやりだったりやけくそだったりする。

ユウトとランスロットはトモ子& a m p・キラの組と徒党を組んだ。

トモ子「風速うんちゃら、波はかんちゃら」

ユウト「漁師のまね事かよ！それよかランスロット、俺が二度ロープを引く。そしたらお前は俺を釣り上げろ」

ランスロット「このような事態だ。やむを得ん。今回だけだぞ」

ランスロットにサムズアップしたユウトは、（温水だろう）シャプールに飛び込む。

ロープが二度引かれたのを確認したランスロットはその腕でロープを勢いよくロープを引いた。ユウトが上がると同時に、トモ子も上がった。

ニンフ「トモキ！あんたって奴は！」

トモ子が釣り上げたのはニンフ。

日本一「ユウト、釣り上げてくれてありがとう…」

そしてユウトが釣り上げたのは日本一だった。

しかしユウト達四人とエンシェントは残念そうに連続して呟いた。

ユウト「小物だね」

エンシエント<小物だな>

ランスロット「小物だ」

トモ子「小物」

キラ「小物だね」

ニンフ&・日本一「誰が小物だ！誰が！」

ユウト「お前等だよ！」

トモ子「とにかく、大きくなったら戻って来ーい」

トモ子が日本一とニンフをリリースしてから…ユウト達が連れるのは、貧乳とも呼べる属性の女性ばかり。その中には、ネプテューヌとブランにロムとラムもいた。

ユウト「残るはギア子と」

キラ「ラクス、無事でいて」

ユウトとキラが言うと、何故か顔を腫らせたトモ子がい上がってきて、スマンと言うくらいの下座をキラに向けた。嫌な予感がした。キラはトモ子に恐る恐る聞き出した。

キラ「智樹……どうしたの？」

トモ子「会長が妨害ありだって……今頃言ってる……スマンキラ。ラクスは会長が釣り上げた」

キラ「…んな、アホなあああああ！！！！？」

ユウト「ついにはキラが壊れたした！？」

ランスロット「もはや事態は一刻を争う。こちらも大物を取るぞ！」

四人「おーっ！！！」

掛け声と同時にユウトはシャプールに飛び込む。そして身近にいた女子・ネプギアを抱え、ランスロットに引き揚げ命令を出す。
勢いよく引かれ、ユウトはネプギアの救出に成功する。

トモ子「うおっほおお！最高記録更新だ！……今までつるべったんばっかだったけど……ここにきてようやく、Cキター！」

ユウト「アホか！あくまでこれは救出だ。……ぜってー会長赦さねえ……」

おちゃらけるトモ子と別に、ユウトはあくまで救出と言い直す。

先程救い上げたネプギアをネプテューヌの隣に座らせ、縛っていたロープを解く。ネプテューヌのロープも救ってすぐに解いておいた。

ネプギア「ありがとうございます」

ユウト「どう致しまして。でもほんつとに、五月田根会長の奴何がしたかったんだよ……」

ネプテューヌ「ねーねーユウト」

ネプギアはユウトに礼を言うと、ユウトは返事をしこの大会への愚痴を零している中、ネプテューヌはユウトを呼んだ。

ユウト「どうしたねぷ子」

ネプテューヌ「水着似合ってる？」

ユウト「似合ってるんじゃないのか？白スク水だけど」

それからというもの、ユウト達は救いに救い、釣りに釣ったが、未だ大物は更新してビキニ上を逆に着たノワスタイル発案者のノワールだった。次点でコンパ。

トモ子「ダメ、もう殆どいない」

ユウト「こっちもだ。そろそろ尽きるぞこいつは」

上がってきたトモ子とユウトはシャプールの内部を軽く説明する。それだけでも充分過ぎる程だった。

すると、キラはトモ子の肩に手を置き、神妙な面持ちで言った。

キラ「知っているかい。主を」

キラの口から出た単語に、引っ掛かりを覚えるユウト、ランスロット、エンシェント、そしてトモ子は首を傾げ首を横に振った。しかしキラは続けて主の情報を語りだした。

キラ「今でもその主は成長を続けていて、釣り上げれば逆転は間違いない。僕はね、怒っているんだ。ラクスを救えなかった自分が！」

ユウト「私情出てるぞ！おい！！」

トモ子「…主」

ランスロット「……ぬっ？……見る！水面から何かが！」

ランスロットに指摘されたユウトとトモ子はその水面を見た。水面は激しく揺れたかと思うと、一つの影が勢いよく飛び出した。主だ。見月そはらという名の主だ。

その時、トモ子はカードの力を解除。元の智樹の姿に戻り、ランスロット達に敬礼。ランスロット達からも敬礼が返された智樹は主を追うため、シャプールに飛び込んだ。

ユウト「さあて帰るか。ねぶ子ギア子帰るぞ」

ネプテューヌ「え？もう帰るの？」

ユウト「何か先が読めてならない」

ネプギア「……それ、何だか私も読めちゃってます」

ネプテューヌ「えっ？えっ？？ねー、ユウトネプギアー！何がどう読めるの？」

何が何だか分かっていないネプテューヌはユウトとネプギアに答えを請う。

そろそろ教えてもいいかと呟くユウトは、自分の読みを言った。

ユウト「まずそはらが自らを拘束していたロープを引きちぎる。そこには智樹がいたはずだ」

ユウトが言うと、後方の巨大モニターには水中での智樹とそはらがロープを引きちぎった。

次いでネプギアもユウトと同じ様にネプテューヌに読みを話す。

ネプギア「それを見た会長さんが一目散に逃げて…」

一方日高仁志は美香子を引き揚げ、会場から美香子共々逃げ出した。

ユウト「そして智樹は…恐らく救出の際にセクハラしたんだろう。

殺人チョップで水柱と共に散る」

モニターの中の智樹がそはらの殺人チョップが直撃。智樹は水柱の頂点で激しく散った。

それから、智樹は一週間。超弩級超絶学園の校舎の一角で、素っ裸で案山子^{かかし}になっていた。

美香子「すつきりするわぁ…」

確信犯の美香子いわく、イライラしていたからという理由らしい。尤も、キラもその被害者に過ぎないが。

続く

つえい5 「よーよー釣りたいかい」 b y美香子（後書き）

次回

ユウト「お前等いい加減にしろよ！」

ネプテューヌ「もうネプギアなんか知らない！」

ショウイチ「座りなさい！！」

次回

つえい6 「妹がいるって、本当に羨ましいですわ」 b yベール

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3966x/>

超弩級超絶学園

2011年12月27日20時46分発行